

# 法と言語

——法文の解釈における文言の影響——\*

近 藤 直 人

## 1. 序

大学で主に法学について学びつつ、一方で言語について研究するゼミに所属する稿者は、法の言語的側面に関心を抱いている。私が法の言語的側面という観点から特に関心を抱いていることは、法の文言と法解釈の関係である。法は主に言語で構成されている。しかし、法の解釈においては言語的意味のみを検討しているわけではなく、様々な要素を考慮して結論を導き出している。そこで、本稿では、法文の解釈において文言がどのような影響をもたらしているのかを主題として考察したい。まず、法解釈について詳細な検討を行う。そして、法解釈の性質から浮かび上がる、法解釈の客観性の問題について検討する。そのうえで、本稿の主題を考察する。

## 2. 法解釈の構造

### 2-1. 法の適用と法の解釈

はるか昔から「社会あるところに法あり」(Ubi societas, ibi ius)といわれるように、社会が成り立つところには法(ルール)が存在している。なぜなら、社会を維持するためには、社会において起こる紛争を処理するために、ルールを決め、ルール違反には一定の制裁を課すことが必要になるためである<sup>1)</sup>。ルールを作ることを通じて、社会が成り立つのである。社会におけるルールである法には、制定法、判例法、慣習法、条理という4つの存在形式がある。法学ではこの4つの存在形式のことを「法源」と呼ぶ。

法を定めたとして、どのように紛争に法を適用するのかが問題となる。なぜなら、法の適用はある事案の当事者を強制的に法に従わせるものであるため、それを当事者に対して

---

\* 社会科学総合学院笹原宏之教授の指導の下に作成された。

三段論法	法的三段論法
大前提	法文
人間は死ぬ運命である。	人を殺した者は、死刑に処する。
小前提	事実
Kは人間である。	被告Kは人を殺した。
結論	判決（結論）
ゆえに、Kは死ぬ運命である。	ゆえに、被告Kを死刑に処する。

図1 三段論法と法的三段論法の対応関係

（出所）大屋（2006）『法解釈の言語哲学 クリプキから根元的規約主義へ』より一部加筆

正当化する理論が必要となるためである。これについて、いわゆる法的三段論法と呼ばれるプロセスが法の適用の際にとられている。三段論法とは、大前提に小前提をあてはめ結論を導く推論過程であるが、この思考のプロセスは法の適用にも合致する。つまり、法の適用は、法文に事実をあてはめ結論を導き出すという演繹作業によって行われる（図1参照）。この演繹作業は、前提となる規約を定めることで、そこから派生する導出の確定性によって結論を正当化するといえ、推論の必然性をめぐる議論における「限定的規約主義」と呼ばれる立場に非常に近い<sup>2)</sup>。例えるならば、すべての個別的事例がそこから派生してくる水源地のようなものとして法文を捉えているのである<sup>3)</sup>。

法的三段論法において注意しなければならないのは、三段論法における小前提にあたる「事実」が間違っていた場合、妥当な結論は導き出されない。法的三段論法が論理的に「正しい」としても、ルールによる事例の解決としては誤った結果となる<sup>4)</sup>。したがって、法的三段論法においては事実認定が重要となる。

法の適用は、事実認定を正確に行い、そのうえで図1が示す演繹作業を行えばすむようにみえる。しかし、法の適用とは別に法の解釈という作業が必要になる。なぜ法の解釈という作業が必要になるのかというと、三段論法における大前提にあたる法文の意味が不明瞭な場合があるためである。法文を構成する言語というものは、必ずしも厳密な意味が確定されていない。そのため、事実をあてはめる法文の意味を確定させていく必要がある。穴戸常寿は、「法的三段論法にいう大前提の中身が明らかではなく、適用しようにも適用できないという場合に必要となるのが、法の解釈という作業である。」と述べる<sup>5)</sup>。なお、本稿では「法解釈」を法文の適用と法文の解釈を含めたものとする。

## 2-2. 法解釈の構造

法解釈については数多くの文献が取り扱っているが、特に法解釈について詳細に研究している文献として、笹倉秀夫の『法解釈講義』（2010、東京大学出版会）が挙げられる。笹倉

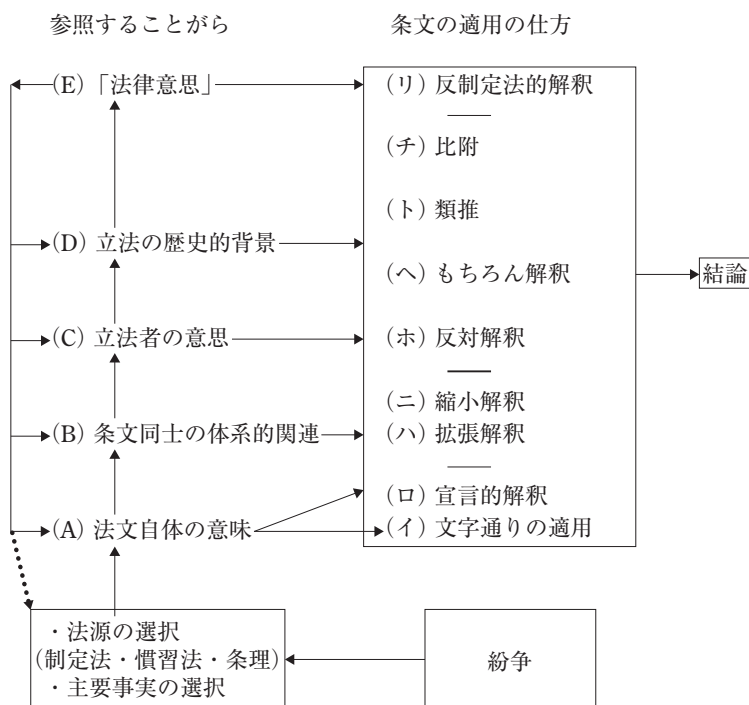


図2 法解釈の構造図

(出所) 笹倉 (2010) 『法解釈講義 [第2版]』より

は、従来の法解釈において概念の混同や欠落が見られると指摘している<sup>6)</sup>。従来の法解釈においては、文理解釈や反対解釈、拡張解釈、縮小解釈などの概念が、言葉の文理からの観点のものとして同一のレベル内で区分されることがある<sup>7)</sup>。しかし、笹倉はこの内の文理解釈という語を従来の概念では使用せず、「法文自体の意味」と「文字通りの適用」という概念に分けている。そして、「法文自体の意味」を「参照することがら」というレベルのものとして、拡張解釈・縮小解釈などの概念が属する「条文の適用の仕方」というレベルのものと区分している<sup>8)</sup>。以下に、図2を基に笹倉による法解釈の展開を概観する。

まず、笹倉は法解釈を「参照することがら」というレベルと、「条文の適用の仕方」というレベルの二つに分ける。「参照することがら」とは、「或る法文の意味を大枠において確定し事件の処理方向を定める作業に関わり、その際に参考にするもの」<sup>9)</sup>とされる。一方で、「条文の適用の仕方」とは、「『参照することがら』によって導き出された方向性に従って、関係する条文をどのようにケースに結び付けて結論を法的に正当化するかを検討を行うこと」<sup>10)</sup>とされる。「参照することがら」は、法文の意味を確定させる際の参考材料となるそれぞれの要素である。また、「参照」する事項であるため、複数のものを根拠にできる。これに対し、「条文の適用の仕方」は、「参照することがら」で得られた概念を

もとにしつつ、ある観点からそれを拡張したり類推したりする<sup>11)</sup>。また、複数のものを併用することはできない。この二つの異なるレベルの作業を行ったうえで、上述した法の適用が行われる。以下に、笹倉による「参照することから」と「条文の適用の仕方」についての記述を省略・抜粋したうえで引用する。

「参照することから」をそれぞれ見ていくと、(A) では、法文のそれ自体としての意味について考察する。(B) では、他の条文や法命題との関連で意味を絞る。(C) では、立法者が明示した立法目的、条文についてのかれの定義、かれによる、条文の体系的な位置づけ・先例との関係づけ等に従って意味を絞る。(D) では、その条文・それを含む関係法律がつくられた歴史的背景などの客観的な事実を参考にして意味を絞る。これら (A) ～ (D) を参照してもそれだけでは決め手にならない場合やまずい結果を生む場合に (E) が参照される。(E) では、法律・制度における本来の目的や実態、正義、「事物のもつ論理」、政策的妥当性を考えつつ、意味を確定する際の方向性（「落としどころ」）を得る。この (E) の考察から直接図の右列（条文の適用の仕方）にいくこともあるが、(E) に導かれつつ再び (A) ～ (D) の考察に立ち返り意味を確定させることもある。法解釈を行う際は、(A) ～ (D) の法源ないし事実からの判断と、結果の妥当性などによる判断である (E) によるバランスのとれた解釈が求められる。(A) ～ (E) のどれかを参考にした考察で結論への方向性が固まると、関係する条文をどのようにケースと論理的に結びつけて結論を法的に正統化するかの検討に向かう。この「条文の適用の仕方」の作業は、大別して次の4つに分けられる。(1) あるケースを既存の条文の「本来の意味」に沿って処理する道であり、(イ) と (ロ) が該当する。(2) あるケースの処理に使える既存の条文はあるが、常用の意味で処理してはまずい結果が生じると判断される場合に、常用の意味を拡張ないし縮小して適用する道であり、(ハ) と (ニ) が該当する。(3) あるケースを既存の条文を使っては処理できない場合に、類比できる既存の或る条文からヒントを得て、それで処理する道であり (ホ)、(ヘ)、(ト)、(チ) が該当する。(4) あるケースに関わる条文が時代遅れだったり不都合極まったりする場合に、それをもう使うべきでないと判断して、文言の指示とは別様に運用する道であり、(リ) が該当する。(笹倉、2010, pp. 5-11)

笹倉は「参照することから」レベルの (A) に限定して、従来の法解釈における概念のうちの一つである「文理解釈」という用語を使用している<sup>12)</sup>。そして、図2が示すように、(A) は法源や主要事実を選択した後に一番初めに行う法解釈作業である。このことは、法解釈における重要な事実を示唆している。それは、「文理解釈」という概念が後述する「条文の適用の仕方」というレベルにおいても前提となっている事実である。つまり、今まで「言葉の文理という観点からの解釈」という同一レベル内で文理解釈、拡張解

釈、縮小解釈などの概念は区分されてきた。そのため、拡張解釈や縮小解釈などは法文の意味を解釈する作業であるかのように見えていた。しかし実際には、まずは文理解釈で得た概念をもとに、場合によっては他の参照することがらをも踏まえたうえで、条文の適用の際に場合に応じて文の意味を拡張したり、縮小したりするということを示している。すなわち、拡張解釈や縮小解釈など「条文の適用の仕方」に属する事項は、「法文の解釈」というよりも法文の意味を事実に合わせて修正したうえで確定する「法文の意味の操作手段」といえる。

このことから、解釈主体が法文の意味を自由に操作できるため、法解釈に客観性は存在しないのではないかという疑念が生じる。この疑念から法解釈にもたらされる問題点は、前述した法の適用が正当化される演繹作業の必然性が失われることにある。なぜなら、法解釈は図1が示すように大前提である法文に小前提である事実をあてはめ、その導出の必然性により帰結を正当化している。そのため、客観性が存在しないとなると、ある法文からどのような帰結をも導けることになり、この演繹作業の正当化根拠が失われることになるためである。そこで、次章では法解釈の客観性の問題について考察する。

### 3. 法解釈の客観性

#### 3-1. 言葉の意味と懐疑的パラドックス

法解釈の客観性の問題は、解釈主体にかかわらず法文の意味が一定の帰結に定まりうるのかという問題である。この問題について、法学では法の解釈の段階（＝「参照することがら」レベル）で「枠」が存在すると考えられている。というのは、枠の中では様々な法の解釈がありえ、究極的には価値判断の問題となるが、枠の外にあたる法の解釈は否定される。つまり、枠の内外によって帰結の成否を他者に正当化することができるとしている。もっとも、解釈の枠自体は参照することがらの様々な要素を考慮して定められるため、原理的に存在するとしてもその枠を明確に認識することは難しい。しかし、高橋和之が「法というものには一定の枠があると思うのです。……法文のテキスト自身が言語によって表現されているわけですから、言語が持っている枠というものだろうと思うのです」と述べる<sup>13)</sup>ように、参照することがらの(A)に正面から反する法解釈が枠の外に位置し、その解釈が否定されるのは概ね共通している。例えば、「人を殺した者は、死刑に処する」という法文が存在したとして、この法文からは窃盗犯の処罰根拠を見出すことはできない。法文の言語的意味から判断して、窃盗犯については何も述べていないと判断されるためである。したがって、(A)が客観的に観測可能であれば、法文から導ける帰結の限界が定まるため、法の適用における導出の必然性が確保され、解釈の枠の内外という観点においては法解釈を他者に正当化できる。

しかし、稿者はここで (A) の客観性について改めて考察する必要があると考える。なぜなら、(A) が客観的に観測可能でないとすれば、解釈の枠は設定することができないためだ。そこで、(A) の客観性の問題について、言葉を含むあらゆる解釈においてその意味を他者に正当化する術はないとする言語哲学上の議論を検討したい。これは「懐疑的パラドックス」と呼ばれるもので、ソール・クリプキによりウィトゲンシュタインの『哲学探究』を解釈した結果として提示された。そして、大屋雄裕が懐疑的パラドックスを詳細に考察し法解釈理論に援用している。大屋による懐疑的パラドックスの概要は以下の通りである。

私が、過去に私が行ったことのない演算「 $68 + 57 = 125$ 」を行ったと仮定しよう。これは簡単な加法の計算だから、私はなんなくこれに正しい答を返すことができるだろう。だがクリプキは、この明確な規則遂行に疑問を呈する懐疑論者が登場させる。彼によれば、私がプラス (plus) という言葉で加算ではなくクワ算、すなわち  $x + y$  においてその双方が 57 未満であれば加算と同じ答えを、そうでなければ「5」を答えとして与える演算を意味していたというのだ。(以下、この演算を区別して「クワス」(quus) と呼ぼう)。我々はこの懐疑論者にどのように反論することができるだろうか。これがクリプキの問題提起である。私は過去に私が従っていたのと同じ規則に従ったと言いたいのだが、懐疑論者はその規則を私が間違っていると主張している。そして、この懐疑を否定するような事実を挙げることはできず、従って私がある規則に従っていることを正当化することはできないというのがクリプキの結論であり、これが彼によって「懐疑的パラドックス」と呼ばれるものである。(大屋, 2006, pp. 68-69)

つまり、懐疑的パラドックスは、第一に私が過去においてある規則に従っていたという事実は存在するか、第二に私がある規則において特定の答を導出するべきだとする根拠が存在するかという問題を提示している<sup>14)</sup>。この問題に対する様々な解答は省略するが<sup>15)</sup>、懐疑的パラドックスを根底から解消する有効な解答はいまだ提示されていない<sup>16)</sup>。この問題が解決されないと、そもそも自分自身が規則の意味を客観的に認識しているとはいえないため、他者に対しその規則の意味の正当性を主張することができなくなる。さらに、懐疑的パラドックスの議論はより一般的な言語使用の局面に拡大することができる。すなわち、プラスがクワスを意味していないと証明できないことは、ある言葉がある意味を持たないということを証明できないのと同じことであるといえる。そして、ある言葉がある意味をもたないと証明できないということは、言葉はある意味をもたないということになる。それゆえ、言葉がそれ自体で独立に客観的な意味をもつということはありません、言葉の意味を他者に正当化することはできないという結論に至る。

### 3-2. 実践描写と行動描写の区別

懐疑的パラドックスについて、野矢茂樹は実践描写と行動描写を区別することによって説明を試みている。実践描写とは、ある規則に関与することなしには成立しえない描写であり、例えば「ヒットを打つ」のような描写は、野球の規則を背景として初めて成立する<sup>17)</sup>。他方、行動描写とは、そのような規則への関与なしに成立しうる描写であり、例えば、「しかじかの形状の棒で球を打つ」のような描写が挙げられる<sup>18)</sup>。そして、行動描写に対しては無数の実践描写が対応する。例えば、「しかじかの形状の棒でかくかくのように球を打った」のようにして為された行動描写は、現行の野球規則では「ヒットを打った」という実践描写に対応するかもしれないが、別の規則のもとでは「ファウルを打った」と描写されるかもしれない<sup>19)</sup>。背景となる規則が異なれば、それはまったく別の実践として描写されうる。この描写の区別を前提として懐疑的パラドックスを考察すると、懐疑的パラドックスにおいては、プラスとクワスを区別するような事実が存在しない（証明できない）という点が焦点であった。しかし、プラスとクワスは、行動描写は同じだが実践描写が異なるのである。したがって、プラスとクワスは実践として異なり両者は区別されうるため、懐疑的パラドックスは解消する。

一方で、このことは論理的にクワスが存在することを否定していない。確かに、我々が生きている社会ではプラスはプラスであり、クワスとしては取り扱ってははいない。しかし、他の未知なる社会ではプラスをクワスとして取り扱っている可能性は否定できない。野矢は、「私は私が自明視している秩序と異なる秩序のもとに生きているクワ斯的他者との出会いを経験することもある」と述べる<sup>20)</sup>。稿者はゼミ活動で実際にこの経験をしている。例えば、「多い」という語が表す意味の概念において、どの程度からが「多い」といえるのか同一のゼミに所属する学生たちによっては全くと言っていいほど異なる認識が示されることがある。まさにクワ斯的他者と出会いであろう。私にとって自然な一歩が、その人にとっては驚くべきものとなり、その人にとって自然な一歩が私にとっては驚くべきものとなるのである<sup>21)</sup>。私はもはや、「われわれ」という一枚岩の幻想に安住することができない<sup>22)</sup>。その意味で、クリプキが指摘したように、けっして正当化されえないジャンプをしなければならない暗闇に私は確かに向かい合っているのである<sup>23)</sup>。したがって、懐疑的パラドックスは解消されるものの、他者に対し客観的な意味が存在することを主張し正当化することはできていない。

### 3-3. 根元的規約主義

そこで野矢は、懐疑的パラドックスからの論理的帰結として「根元的規約主義」という立場を提唱している。根元的規約主義と対照されるのは、前述した限定的規約主義である。限定的規約主義は、前提から結論への導出を、その導出を成り立たせる推論規則によ

って説明しようとする<sup>24)</sup>。そこでは、我々が規約したという事実の存在する直接的規約と、導出によって構成される派生的規約が区別される<sup>25)</sup>。そして、図1が示すようにその導出は言語という規則によって説明される。しかし、限定的規約主義は懐疑的パラドックスの前にその正当性を失う。というのも、推論規則である言語自体が規約であることにより前提の一つになってしまうためである（3-2 後段参照）。あらゆる導出に「なぜそうなるのか」という疑念が提示されうる。それを受け野矢は、直接的規約と派生的規約という区分を捨て、全てが直接的規約であるとする。野矢は、「あらゆる『べし』、あらゆる『ねばならない』は、何か先立つ規約から発生したものではなく、まさにそこにおいて取り決められた規約にほかならない」と述べる<sup>26)</sup>。端的にこのことの意味を示すために、野矢による例を引用する。

亀は問う。

「どうして (a) から (z) が帰結しなければならないのかな」

アキレスは答える。

「いや、これはそう取り決めようという私からの提案なのだ」

亀が同意すればそれでよし、もし同意しなかったらこの推論およびそれを用いた実践においてアキレスと亀は共同でことを為すことができないということにほかならない。ちょうど、野球の規則に従う人と従わない人がともに野球をプレイすることができないように。(野矢, 1999, p. 138)

この例では、論証が導出の確定性ではなくその場においての提案から構成されていることが示されている。では、論証という作業はどのような意義があるといえるのか。野矢は、「定理に意味を与え、翻って公理にも意味を与えるものなのである」と述べる<sup>27)</sup>。すなわち、上記の例でいえば、(a) から (z) が帰結するという取り決めを提案することによって、(a) から (z) が帰結するという導出が構築される。懐疑的パラドックスは、言葉が意味をもたないということの論理的帰結として、「意味を理解している」ということが不可能になってしまうことを指摘している。ここで、根元的規約主義は、言語を使うことによって意味が制作されると考えることにより、この問題に答えようとしているのである<sup>28)</sup>。つまり、論証とは規約 (1) が規約 (2) に対して必然的であるという関係を制作することであり、それによって規約 (1) の意味を定める行為なのだ<sup>29)</sup>。

### 3-4. 法における意味と解釈

大屋は根元的規約主義を法解釈論に応用している。すなわち、「我々がある法文を根拠として特定の帰結の正当化を試みるとき、それはその法文の意味がその帰結を含むように理解されるべきだ」という主張が行われているのである。そして人々がその主張を受け入れることにより、社会的に共有された物語りと、それを共有する〈我々〉が現れる。そのよ

うに法文に意味を付与する行為を、我々は『物語り』と呼んだのであった。解釈とは物語りを制作すること、規則と帰結との関係を一定の意味連関の下に置くことなのである。」と述べる<sup>30)</sup>。稿者もこの大屋の分析に賛同する。笹倉の提示した法解釈の構造を踏まえたうえで稿者が考える法解釈の性質について述べると、法解釈とは、解釈主体が法文に意味(参照することがらの(A)～(E)を考慮した結果としての意味)を与え、さらに適用の際に法文の文言の意味(言語的意味)を操作することによりその解釈に説得力をもたせるという作業である。したがって、法文の文言はそれ自体で独立に客観的な意味をもつものではない。ゆえに、法文は法解釈によって意味を付与されるものであり、決してすべての個別的事例がそこから派生してくる水源地のようなものではない。

#### 4. 法文の解釈における文言の影響

根元的規約主義をもとにした法解釈論は、あらゆる解釈を正当化してしまい法の意義を没却してしまいかねないと懸念されている<sup>31)</sup>。しかし、大屋の指摘する通り、不都合な真実から目をそらせば、それは消えてなくなるわけではない<sup>32)</sup>。例え不都合なものであろうと、根元的規約主義はクリプキのパラドックスからの論理的帰結として提示されている。そして、前述のように、この立場において言葉に客観的な意味は存在しないのである。

稿者は、根元的規約主義は法解釈のある性質を示唆していると考える。それは、法解釈のコミュニケーション性である。大屋の指摘する通り、法解釈は法文に意味を付与している。そして、その主張が受け入れられるかはその法文の解釈に関心を抱く人々とのやり取りによって決まる<sup>33)</sup>。このやり取りはまさにコミュニケーションといえる。そこから、法文の解釈における文言の影響についても一定の示唆が与えられる。確かに、文言に独立した客観的な意味は存在しない。しかし、文言には今まで取り決められてきた意味がある。それは明確なものではなく、常に揺れ動いている。言語間のやり取りが滞るたびに新しく取り決められ、他者に絶対的な正当性を主張できるものでもない。それでも、今まで取り決められてきた意味の積み重ねが、社会における言語的コミュニケーションを維持している。その取り決められてきた意味の下に他の無限の解釈は抑圧される。大屋はこのことを「それは暴力なのだ」と象徴的に言い表している<sup>34)</sup>。個々の解釈を否定するのは客観性ではなく、あくまでも個々自身、あるいは個々の集合体である社会の責任なのである。したがって、「法文の自体の意味」という概念は、今まで取り決められてきた意味という観点においていまだ有用性を失っていない。

この観点から、稿者は法文における文言の意味は解釈に制約をもたらしていると考える。すなわち、参照することがらの(A)は論理的にはどのような意味にもなるため、その意味を他者正当化することはできず、解釈の枠を設けることはできない。しかし、(A)

に正面から反する解釈は、解釈作業の双方向性を無視している。その孤立した解釈は、論理的には否定されないけれども、他者からは受け入れ難い。論理的にではなく社会的にその説得力を失うのである。ところで、笹倉の提示した法解釈の構造によれば、解釈主体は法文の文言の意味を操作する。このような法解釈の構造では、解釈主体は自身の主張する法文の意味の帰結に合わせるように法文の文言の意味を操作するため、結局のところ法文の文言が解釈に制約をもたらすとはいえないのではないか。しかし、稿者は文言の意味を操作するにも限度があると考ええる。例えば、「人を殺した者は、死刑に処する」という法文の「人」の意味を操作して、犬を殺した者をも死刑にするとする法解釈は、論理的には否定できないもののその説得力は著しく低い。なぜなら、「人」と「犬」では社会通念上の意味が著しく異なるためである<sup>35)</sup>。よって、法文の文言は法文の解釈を制約している。そして、法文の解釈を制約するという役割が、法解釈というコミュニケーションを保つために重要なのである<sup>36)</sup>。したがって、法文の文言は、解釈主体にその文言の意味に沿った解釈を要請し、文言の意味に反する解釈の説得力を低下させることにより、法文の解釈に制約を与え野放図とならないようにするという影響をもたらしていると結論する。

#### 注

- 1) 山下ほか (2013) p. 2
- 2) 大屋 (2006) p. 4
- 3) 野矢 (2010a) p. 165 参照
- 4) 山下ほか (2013) pp. 4-5
- 5) 山下ほか (2013) p. 7
- 6) 笹倉 (2010) pp. 3-4
- 7) 山下ほか (2013) pp. 25-26
- 8) 笹倉 (2010) p. 4
- 9) 笹倉 (2010) p. 5
- 10) 笹倉 (2010) p. 8
- 11) 笹倉 (2010) p. 12
- 12) 笹倉 (2010) p. 12
- 13) 高橋 (2004) pp. 187-189
- 14) 大屋 (2006) p. 69

なお、第2の問題はウィトゲンシュタインの解釈としては間違っているとしてもクリプキ自身の哲学的問いであるといえる (注 16 参照)。

- 15) 懐疑のパラドックスに対する解答として、①規則の記憶、②規則の概念、③傾向性、④単純性、が主に挙げられる (大屋, 2006, pp. 69-70 参照)。この他にも、数学の公理を使った証明などがある (飯田, 2004, pp. 61-63 参照) がいずれも懐疑のパラドックスから逃れられていない。
- 16) クリプキ自身の解答は「懐疑的解決」(skeptical solution) と定位される。(大屋, 2006, pp. 80-81 参照)。しかし、懐疑的解決には多くの欠陥が指摘されている。野矢は、「一致すべき一致」と「たんなる事実としての一致」を区別すべきであると主張している (野矢, 2010a, pp. 146-147 参照)。野矢による指摘の他に①「共同体」が何を意味しているのか、②共同体によるチェックが可能なのか、③「一致している」とはどういうことか、といった指摘が挙げられる (大屋, 2006, pp. 94-99 参照)。また、クリプキによる「哲学探究」の解釈は誤っているとされるのが一般的である (野矢,

2010a, pp. 151-153 や長谷部, 2000, p. 117 注 12 参照)。しかし、ウィトゲンシュタインの解釈としては誤っていてもなおクリプキ自身の哲学的問い（我々と異なる結果を出した他者に対してどうしたら自分たちの答えを正当化することができるか）として懐疑的パラドックスは重要である。本文 3-2 で記述した野矢による懐疑的パラドックスの解答は、このクリプキ自身の問いには答えていない（本文 3-2 後段参照）。

17) 野矢 (2010a) p. 148

18) 野矢 (2010a) p. 148

19) 野矢 (2010a) pp. 148-149

20) 野矢 (2010a) p. 154

21) 野矢 (2010a) p. 154

22) 野矢 (2010a) p. 154

23) 野矢 (2010a) p. 154

24) 大屋 (2006) p. 138

25) 大屋 (2006) p. 137

直接的規約と派生的規約の例を挙げると、1kg は 1000g とするのが直接的規約であり、2kg は 2000g となるのが派生的規約である。限定的規約主義は、1kg が 1000g と取り決められることにより、他の派生的規約はその導出の確定性より導かれるとする。

26) 野矢 (2010a) p. 164

27) 野矢 (2010a) p. 176

28) 大屋 (2006) pp. 139-140

29) 大屋 (2006) p. 140

なお、根元的規約主義は数学の規則などだけではなく日常生活における言葉の意味も取り決めによって意味を定めているということになる。このことから、我々は取り決めなど行っているのであろうかという批判が考えられる。野矢はこの指摘に対して、人々は普段は規則に盲目的に従い、規則の意味が問題となるのはその意味を共有しない者が現れた場合のみであるとして、主張の適宜性の観点から説明している（野矢, 2010a, pp. 180-192 参照）。

30) 大屋 (2006) p. 169

31) 大屋雄裕 (2007)「根元的規約主義は解釈改憲を放縱化させるのか」『岩波講座 憲法 1 立憲主義の哲学的地平』, 岩波書店, pp. 283-300 は、編者の井上達夫より根元的規約主義の帰結は解釈改憲が無制限に行われるということなのかという懸念が主題として提示され、それを受けた大屋が著した論稿である。

32) 大屋 (2007) p. 294

この文は、言葉に客観的な意味が存在することを自明視する前提のもと憲法変遷論を否定する浦部法穂に対する批判である。もっとも憲法変遷論は解釈の枠の存在を前提としているため大屋の法解釈理論とは異なる。

33)「法文に関心を抱く人々」とは、一般の人々を含むあらゆるその法文の解釈を考える人々を念頭に置く。この点に関連して、法律の解釈は結局のところ法律家に委ねられるとする見解（長谷部, 2004, pp. 173-174 参照）がある。稿者はこの見解に基本的には賛同する。しかし、有権解釈機関による解釈や法律家による解釈は一般の人々をも含む他者からの評価対象であり、憲法 9 条 2 項の解釈論のように一般の人々が関心を寄せる法文に関しては、一般の人々が受け入れる解釈も法解釈のコミュニケーション性を念頭に置くと重要となりうると稿者は考える。なぜなら、一般の人々が考える法解釈（主に参照することがらの (A) をもとにした解釈だと思われる）と法律家共同体による法解釈があまりにも乖離する場合、一般の人々は法に対する尊敬を失い、その法文だけではなく法全体が機能しなくなかなかねないと稿者は懸念するためである（長谷部, 2014, pp. 17-18 参照）。稿者の問題意識とは異なるベクトルではあるものの関連する論説として、法律家が法解釈において論理の一貫性を失っているとみられるような行動をすることにより法の尊敬が失われることの危険性について述べる（大屋, 2015 参照）。

34) 大屋 (2006) p. 202

35) もちろん、法の属するカテゴリー（公法、私法、刑事法など）によって法文における文言の意味の重要性は異なる。本文の例は刑事法の規律対象なので刑事法の自由保障機能や罪刑法定主義より文言の意味が重視される。一方で、憲法の条文などに典型的な、文言のみでは規律対象がよく分からない場合は文言の意味以外の要素がより重要視される。また、表現の自由を規制する法文の解釈において、一般の人々が理解できる法文の文言を根拠とする解釈のみが許されるべきとする提言が存在する（橋本, 2015, p. 78）など、法文が規律する対象の性質によっても文言の意味の重要性が異なる。しかし、いずれにしても法文の文言の意味が解釈に制約をもたらすこと自体は共通している。

36) 図2の「条文の適用の仕方」における（リ）は、論理的には否定されないがその法解釈の説得力は著しく低くなるといえる。（リ）に当たる2006年改正前の利息制限法1条2項に関する最高裁判決について笹倉, 2010, pp. 148-151 参照。

## 参考文献

- 碧海純一 (1965) 『法と言語』, 日本評論社
- 飯田隆 (2004) 『クリプキ 言葉は意味をもてるか』, 日本放送出版協会 [NHK 出版]
- 五十嵐清 (2002) 『法学入門 [第3版]』, 悠々社
- 大屋雄裕 (2006) 『法解釈の言語哲学 クリプキから根元的規約主義へ』, 勁草書房
- 大屋雄裕 (2007) 「根元的規約主義は解釈改憲を放縦化させるのか」『岩波講座 憲法1 立憲主義の哲学的地平』, 岩波書店, pp. 283-300
- 大屋雄裕 (2015) 「憲法改正限界論の限界をめぐる」『法の理論 33 特集<日本国憲法のゆくえ>』, 成文堂
- 笹倉秀夫 (2002) 『法哲学講義』, 東京大学出版会
- 笹倉秀夫 (2010) 『法解釈講義 [第2版]』, 東京大学出版会
- 末川博 (2014) 『法学入門 [第6版補訂版]』, 有斐閣
- 高橋和之・山元一 (2004) 「行政権と司法権」『憲法学説に聞く』, 日本評論社, pp. 187-189
- 野矢茂樹 (1990) 「根元的規約主義 論証の生きる場としての論理」『現代思想』, 1990年10月号, 青戸社, pp. 130-147
- 野矢茂樹 (2010a) 『哲学・航海日誌Ⅰ』, 中央公論新社
- 野矢茂樹 (2010b) 『哲学・航海日誌Ⅱ』, 中央公論新社
- 橋内武・堀田秀吾編 (2012) 『法と言語 法言語学へのいざない』, くろしお出版
- 橋本直記 (2015) 「法文の明確性判断に関する再検討」『早稲田社会科学総合研究別冊「2014年度 学生論文集」』, pp. 69-81
- 長谷部恭男 (2000) 『比較不能な価値の迷路 リベラル・デモクラシーの憲法理論』, 東京大学出版会
- 長谷部恭男 (2004) 『憲法と平和を問いなおす』, 筑摩書房
- 長谷部恭男 (2006) 『憲法の理性』, 東京大学出版会
- 長谷部恭男 (2014) 「日本の法制度を考える」『BRIDGE』5: 16-21, 早大政友会
- 南野森 (2006) 「憲法・憲法解釈・憲法学」『憲法学の現代的論点』, 有斐閣
- 山下純司・島田聡一郎・穴戸常寿 (2013) 『法解釈入門 「法的」に考えるための第一歩』, 有斐閣
- ジョン・ギボンズ, 中根育子監訳 (2013) 『法言語学入門 司法制度におけることば』, 東京外国語大学出版会
- S.A. クリプキ, 黒崎宏訳 (1983) 『ウイトゲンシュタインのパラドックス 規則・私的言語・他人の心』, 産業図書